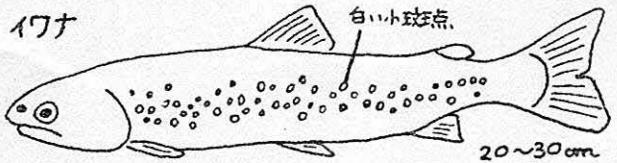


谷川の魚—サケ科—

山々の緑も濃くなり、谷川の魚影が目に入る季節です。今回は富山県の谷川にすむサケ科の魚を紹介します。

・イワナ

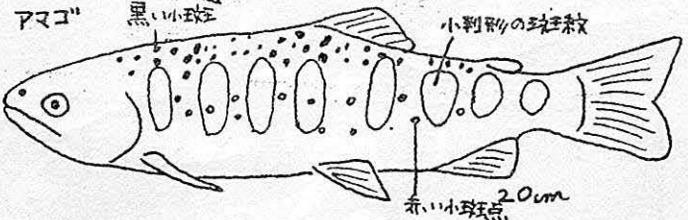
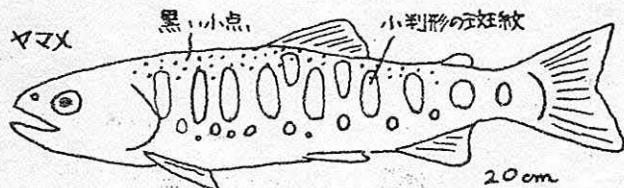
イワナ



「岩魚」と書くように、兩岸に岩がせまる溪流の代表的な魚です。県内東部では、北アルプスの標高2000mを越す沢から、海岸近くまでみられます。おもに、水生昆虫や水面に落ちてくる陸上の小動物を食べますが、小魚やカエル、サンショウウオ、時にはヘビなども呑み込む貪欲な魚です。ダム湖では、流れ落ちてくる餌の量が豊富なためが大型のものがみられます。東北地方や北海道には海へ下るアメマスがいますが、イワナとアメマスとは同じ種だと考える人もいます。

・ヤマメとアマゴ

ヤマメは、一般にイワナよりも下流にすみ、「すみわけ」をしている例として有名ですが、混生している場合も知られています。

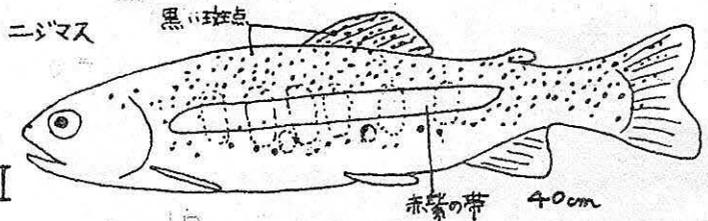


ヤマメは、海へ下るサクラマスが一生を川で過ごすようになった河川型につけられた名前です。体の側面には、サケ科の幼魚の特徴

であるパーマークという小判型の模様があり、成熟しても消えませんが、ヤマメとよく似た魚で、体の側面に赤い点のあるアマゴが県内でもみられるようになりました。1972～1974年の富山県の調査で、庄川や角川の上流でみつけられています。もともとは、神奈川県より西の本州太平洋側や四国などの溪流に分布していましたが、養殖がさかんになり、稚魚が県内の河川に入り込んだのです。赤い点は、死ぬと消えてしまうので、ヤマメとアマゴの区別はむずかしくなります。

・ニジマス

成長すると、体側に虹



のように赤いたてじまがあらわれるのでこの名があります（英名レインボウ トラウト）。原産地は北アメリカで、日本には1877年以後、持ち込まれました。ニジマスは、病気に強く、飼育もしやすいため、日本各地で養殖・放流されています。しかし、日本の河川は急で産卵に適さないためが自然状態ではほとんど繁殖せず、毎年、人工的に育てた稚魚を放流しなければなりません。

谷川にすむサケ科の魚は、最近の釣りブームで非常に数が少なくなり、稚魚が放流されているのが現状です。また、ダムなどの建設で昔とは様子が変わってしまった川もたくさんあります。（H.N）



富山市科学文化センター

富山市西中野町3丁目1番19号（〒930-11）

電話 富山(0764) 91-2123(代表)